栄光学園創立者による自筆メモと今後の教育

- 日本の教育制度と異文化交流 -

1

2024.3.1
（株）モナビITコンサルティング
大野邦夫

2

目次

- はじめに
- 教育のグローバル化とキリスト教文化
- フォス校長のミッションスクール改革案
- グローバル人材の育成と世界文化圏
- 権威主義影響下の教育
- 戦後の日本の公教育の経緯
- まとめ及び考察
- おわりに

3

はじめに：これまでの経緯

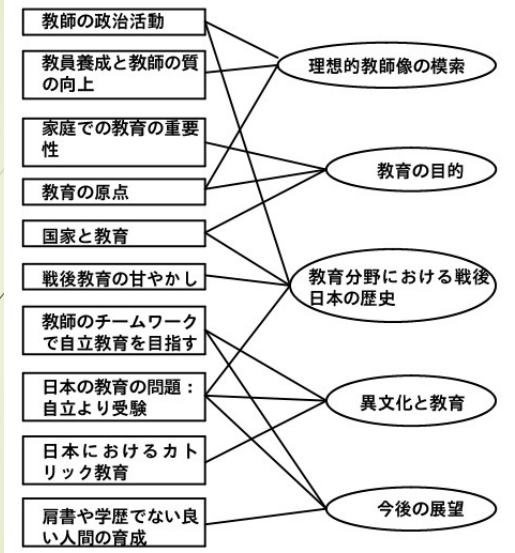
- 2018年秋に、栄光学園同窓会アーカイブ・チームがグスタフ・フォス初代校長のローマ字で記された自筆メモを発見
- 2022年8月、画像電子学会年次大会で“栄光学園創立者による自筆メモの分析と考察” を発表
- 2022年12月、第4回DMH研究会で “栄光学園創立者による自筆メモの構成と内容”, を発表
- 2024年1月、“栄光学園創立者による自筆メモと戦後の教育～教育の目的と期待される教師像” を発表

4

自筆メモの骨子
～DMH4研究会報告の内容～

- 1）教師の政治活動は好ましくない
- 2）教員養成と教師の質の向上
- 3）家庭での教育・しつけの重要性
- 4）教育の原点：自立した社会人の育成
- 5）国家と教育：日本の教育は戦前の「国家」を「経済」に置き換えた
- 6）戦後教育の甘やかし：民主的教育の無責任さ
- 7）教師のチームワークで自立教育を目指す
- 8）日本の教育の問題：自立より受験
- 9）日本におけるカトリック教育：布教することではない
- 10）肩書や学歴でない良い人間の育成

5



自筆メモの構成とその解釈

- 前回（DMH6）の内容
  - 教育の目的
  - 理想的教師像の模索
  - 戦後日本の教育
- 今回（DMH7）の内容
  - 戦後日本の教育
  - 異文化と教育
  - 今後の展望

3/3/2024

6

教育のグローバル化とキリスト教文化

3/3/2024

7

職業教育の国際標準化

- ISO/TC232による「非公式教育の標準化」
  - 非公式教育：職業訓練教育を中心とする世界各国の民族文化から独立した教育分野
- 2010年に ISO29990として正式に国際標準化された
  - 教育内容を標準化するのではなく、マネジメントの要件を規定
  - ISO9000（品質管理）やISO14000（環境基準）と同様
- ISO29991：「語学学習サービス - 要求事項」の標準化
  - 英語を中心とする語学学習サービス の普及に貢献
- 職業教育のグローバル化は英語教育を端緒に進展しつつある
  - 典型はアジア諸国の初等教育における英語教育

8

キリスト教教育

- グローバル教育とキリスト教教育は類似面がある
- キリスト教教育は、欧米先進国の価値観を発展途上国にもたらした
- 戦後の日本の教育と経済発展は上記側面があるがそうでない面もあった
- フォス校長は、日本の教育の道徳的・倫理的な面で問題を認めた
- 教員に連帯感を持たせる教育を行うことをフォス校長は模索した

9

日本文化とキリスト教

- 16世紀半ばのザビエルの来航, 19世紀半ばのペリー来航, 20世紀半ばのマッカーサーによる日本占領という3回の出来事が日本の社会変革とキリスト教伝道に関係
- 上記3事例には共通パターンが存在
  - (1) 先行期：日本社会としての停滞や混乱が続き, 新たなインパクトを待ち受ける.
  - (2) 導入期：西洋からのインパクトにより, 社会全体が緊張し, インパクトを受け入れる.
  - (3) 発展期：インパクトが徐々に国内で進展し, 西洋技術の普及により経済的な発展をもたらす.
  - (4) 円熟期：経済発展し生活水準が向上すると共に, 日本の伝統的な文化が台頭する.
  - (5) 完了期：日本の伝統的な文化の勢力が力を得て, 西洋文化を推進したグループを駆逐し, 社会が停滞する.

10

ヘロディアンとゼロット

- 外国文化を積極的に吸収するグループ（ヘロディアン）と排外主義的な保守主義的なグループ（ゼロット）との対比
- 日本社会のキリスト教受容パターンは、ヘロディアンとゼロットとの関係で説明可能
- ミッションスクールの教育は, 以前は布教によるクリスチャンの増大を目指すものであったが、現在は不可能

11

孤独な群衆とキリスト教的価値観

- カトリック教会が伝統指向に, プロテスタント教会が内部指向に対応
- 他人指向に対応する価値観をキリスト教文化に対応付ける必要性
- 非西欧では内部指向的な社会的性格がプロテスタント教会に対応する訳ではない
- 日本では内部指向的性格がプロテスタンティズムではなく立身出世主義
- 他人指向的性格は、情報メディアと科学技術的価値観に支配される

12

フォス校長のミッションスクール改革案

13

初等教育と中等教育の連携

- 聖マリア小学校の関係者から相談を受けた
- 男子校の栄光学園で成功したモデルを女子の小学校, 中学・高校に継承
- 小学校と中学を統合して9年間のカリキュラムとして公立校を差別化
- 特徴ある教育は基本学習に重点を置く方針でその一つは,英語教育
- アイデアのみだがグローバル教育の先取り

14

教員のチームワークによる道徳教育

- フォス校長は道徳教育の必要性を指摘した
- それは道徳や倫理の専門教科を教えることではなく, それ以外の一般教科において, 人間のあり方, 社会人としての生き方に関係付けた教育を提言
- そのためには教員同志のチームワークが重要
- 教員を連携させる価値観に基づく教育方針を必要とするとともに, 教員相互間の切磋琢磨を必要とする
- 以上は, 公立学校では不可能なので, 私学のミッションスクールとしての優位性が存在

15

新たなるリベラルアーツ教育の可能性

- キリスト教をリベラルアーツと読み替えると，キリスト教の影響力が必ずしも大きくない現在の日本社会でも具体性がある
- マスメディアやネット社会の弊害から逃れられる人間教育を，リベラルアーツを中核として教師のチームワークで実施する
- チームワーク・ツールとして，グループウエアに支援される哲学やリベラルアーツ情報は学際的なチーム形成の具体的なコンテンツ環境と考えられる
- 以上のような情報環境の構築と運用が今後のデジタル人文学の検討領域になることが期待される．

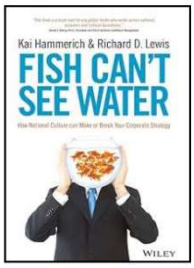
16

グローバル人材の育成と世界文化圏

17

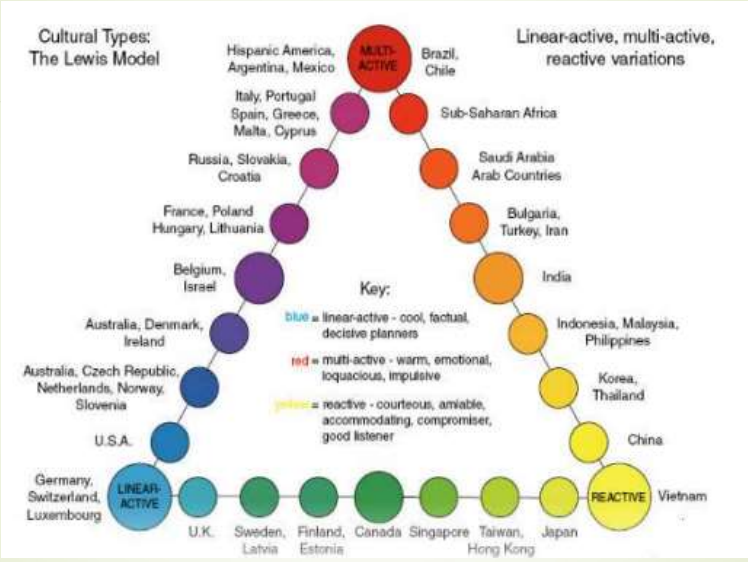
リチャード・ルイスの文化マップ

- SIETAR Europa Congress 2015でリチャード・ルイスという英国人の異文化研究の専門家と知り合いになる



18

19



20

国民文化の比較

- 日本
  - (1)言語能力の貧困
  - (2)面子と名誉の重視
  - (3)過剰な礼儀
  - (4)年功序列
  - (5)会社の神聖視
  - (6)長期指向
- 米国
  - (1)アメリカン・ドリーム
  - (2)行動へのスピード
  - (3)実践的
  - (4)男性的な挑戦性
  - (5)異文化を無視
  - (6)忍耐不足
- ドイツ
  - (1)事実に基づく企画と手順
  - (2)秩序指向
  - (3)労働倫理
  - (4)輸出への関心
  - (5)階層的官僚制
  - (6)長期の休暇
- 英国
  - (1)個人主義と独創性
  - (2)伝統による工業的強さ
  - (3)階級制度
  - (4)閉鎖的な偏狭さ
  - (5)安定な制度
  - (6)変化への遅れ
- ロシア
  - (1)愛国心
  - (2)集団主義精神
  - (3)豊富な天然資源
  - (4)物理的な耐久力
  - (5)技術系主体の教育
  - (6)無関心層の増大
- 中国
  - (1)就労倫理
  - (2)巨大な労働力
  - (3)低賃金
  - (4)開発への適時性
  - (5)一党支配
  - (6)中間層の進出

21

欧米文化と民主主義

- 戦後の日本が, 欧米から民主主義を学ぼうとしているにも関わらず, それが機能しない状況が推察できる
  - ヘロディアンとゼロット
  - リニアアクティブ文化（L-文化）に対するリアクティブ（R-文化）文化
- ミッションスクールは、ヘロディアンによるヘロディアン養成の場であった
- 今後は、ヘロディアンとゼロットを融合する教育の場とする必要がある

22

権威主義影響下の教育

23

日本の戦後教育は特異な例ではない

- 西欧文明や欧米文化のインパクトを受けた直後は進取の気性に富む知的階層のヘロディアンが社会的に活躍する
- そのインパクトを消化・適応して経済発展した後は, 保守的な大衆によるロゼットが徐々に優位になる
  - 以上のパターンは、日本ばかりではなく、中国や東南アジア、イスラム文化圏でも顕在化
  - ロシアのウクライナ侵攻は戦前の日本の中国侵攻に類似
- 背景には, 知的階層によるヘロディアン文化から, 大衆的なゼロット文化への移行という共通パターンが存在しそれを教育が推進する
- 大衆の反逆がゼロット文化を強化し権威主義, ファシズムへと進展させる

24

経済発展の手段としての教育

- 戦前の日本の国家主義的な教育は, 戦後に発展途上国で評価され, 導入されつつある
  - 途上国における国の発展には, 何を差し置いても経済発展が重要
  - 工業化・情報化のための人材育成のためには民主的な議論よりは, 強力な行政の指導が効果的
- 日本は経済発展が成功した段階から, さらに社会インフラを整備し, 社会制度を民主化し, 安心・安全・快適に生活を送れる福祉国家として発展すべき段階で頓挫
  - 将来を展望する自由な議論が不得手な日本文化が失われた30年を生じさせた
  - 上記日本文化は、戦前の国家主義的な教育の産物
  - フォス校長の『戦前の国家のための教育の「国家」を「社会・経済」に置き換えたに過ぎない』という記述の妥当性を物語る

25

受験教育と立身出世主義

- 途上国の経済発展と教育に関しては, デイヴィッド・リースマンの「孤独な群衆」による伝統指向から内部指向への移行が対応
- 内部指向における勤勉性のモチベーションが, 欧米ではプロテスタンティズムを背景にしたのに対して, 日本では儒教道徳が存在
- 欧米における内部指向の価値観が, フロンティア精神であるのに対し, 日本では立身出世主義が対応し, それが受験教育を生じさせる
- 日本の年功序列・終身雇用という組織文化で、良い職場に就職すると安定な人生が保証される
- この文化を変えないと、日本は発展しない

26

福祉社会を目指す教育

- 立身出世主義は敗者のみならず勝者である成功者すら必ずしも幸福にしていない（村上龍）
- 「生活費と充実感を保証する仕事を持ち, かつ信頼できる小さな共同体を持っている人」が人生の成功者
- 福祉社会では、上記のような価値観が重要になる
- 立身出世主義は内部指向的価値観の産物で、他人指向的価値観では変わりつつある

27

戦後の日本の公教育の経緯

28

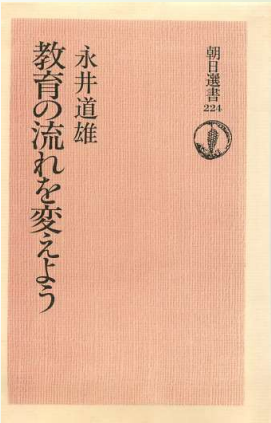
三木内閣永井文相による教育改革

- 永井道雄氏が1974年の三木内閣の組閣の際に文部大臣に就任
- 国会議員でない民間人を大臣に起用するのは稀であるが幅広い知識を有する優れた専門家が担当すべき
- 日本では大臣のポストも受験教育の背景である立身出世主義の対象になっている

29

永井文相が提起した課題と政策

- 課題
  - 教育の政治からの独立
  - 教育の国策手段化
  - 試験第一主義・選抜主義
  - 教育計画の不在
- 政策
  - (1)大学入試改革,
  - (2)初等中等教育カリキュラムの改善,
  - (3)高等教育の格差是正,
  - (4)学歴偏重の廃止



30

その後の日本の教育

- 永井文相による教育改革の試みは, 希望が持てる内容ではあったが 結局は絵に描いた餅
- 永井道雄氏は, その後国連大学の日本誘致に成功したものの, 既存の日本の大学との連携がうまく行かず, この試みも頓挫
- 1999年に, 小淵政権下で国旗・国歌法が制定された
- 2006年の第一次安倍政権で教育基本法に愛国心が盛り込まれた
- 第二次安倍政権以降, 教育再生会議を通じた道徳の教科化、首長による教育長の任免, 大学の学長の管理権限強化などが提言実施された
- 自由な進取な思想を持つ人にとって教育者は魅力的な職業ではなくなるりつつあり、文科省の指導を淡々とこなすサラーリマン教師が蔓延

31

まとめ及び考察

32

フォス校長から学ぶべき教訓

- 逝去された後の追悼ミサの際に，「火を投ずるために～フォス先生の人と教え」という冊子が配られた
- 本人の希望・意志とはまったく異なる状況で，人生が展開した
- ドイツの若い少年のことを考えて，神父になろうと思った
- 高等学校を卒業した後，イエズス会という，カトリック教会の修道会に，入会
- イエズス会に入ってから間もなく日本へ行ってはどうかと，突然言われた

33

人生は思い通りにはならない

- 戦後の日本への再赴任の後に, 栄光学園の創立という再度の想定外の人事があった
- 現地を訪問して目にした状況があまりに酷かったので, さすがのフォスさんもそこで出会ったデッカー大佐に愚痴をこぼしてしまう
- 大学の教授の王座から降りて, ちっちゃい中学のいたずら坊主, 及び, 我の強い高校生を相手にして, 長い30年間をがんばってきた
- 実は, 昔の夢と大して違っていないような仕事で, 本当に楽しかった
- 原動力になったのは, 若い時から身につけた人生観

34

何をなしたかよりどう生きるか

- 何をやろうか, それは大した問題ではない.
- その何を, 如何にするのか, それによって人間の価値, そして, 仕事に対しての満足感を, そして, 隣人や社会に対しての貢献も決まってくる
- 高い理想に導かれて, 次の時代の建設, もしくは開拓に, 参加できる人間になること
- 歴史の表舞台に立って, 観衆のやんやの喝采を浴びる人を考えていない.
- 私の考えているのは, それぞれの立場において, 自己の能力, そして特に, 自己の人格をもって, この社会の中を, すこしでも良くすること
- 与えられた状況で努力して生きることが大切

おわりに

- 展望が見えない日本社会の現状を打破するには，フォス校長が教育目標として掲げた「自立した社会人」の育成が重要な意味を持つ
- 日本の教育の保守化と受験教育の背景には、トインビーによるヘロディアン・ゼロットの歴史的背景と、ルイスによるリアクティブな儒教文化に基づく立身出世主義が存在し、それを変えるのは容易ではない
- 日本社会を変え得る「自立した社会人」の育成のためには、リベラルアーツ教育が重要で、そのための教師のチームワークによる教育と、デジタル人文学関連のコンテンツが期待される
- 日本社会の現状を打破するには，「自立した社会人」としての自律的な個人が既存の価値観に挑戦して新たな時代を切り開く必要がある
- その状況は田浦の旧海軍の工場跡の廃墟に立ち尽くして，栄光学園の創立を思ったフォス校長という人物像が参考になる